



小説

島崎藤村選評

地

朝霧

岩代服部貞子

「勝手にしろ！」男は遂に怒り呼んだ。

順序だつた女の口に、道理は認めても、男は女に負けまいもの、と昔から定つて居るやう、思つて居る男の中の男であるから、鈍辯の悲しき、沈黙をやむなくされる時に、口を突いて出て来る言葉は此語である。

女は黙つてしまつた。黙つて男の顔……を睨めた。が後からであるから顔は見えなかつたが、くわつと脇を向いて痰を吐いた時の横顔は赤かつた。

満身の怒りをこめて、俄に強く曳き出したので、男の怒つたのを見ると、稍々氣の毒になつて、言

ひ過ぎた吾が言葉を考へて居た女の後押しの手は車から離れた。離れた其足許に、捨てられた虫喰ひ草が、車の齒にかけられてつぶれたのが伏目の目に入る。ハイくと若い女の聲がして、草をつけた馬が脇を通る。馬を遣り過して向ふを見ると、男は餘程離れて居た。

思ふことを、言はふと思つて口にして見ると、さて十分に往かない。十分に言ひあらはさうと、彼々して怒りしてと種々に其言葉を補つて見る。けれども補ふ其言葉がまた十分に往かない。對手はそんなことは知らないから、言つた其言語に對して彼々と言ひ怒うと答へる。で、えへさうぢやないわ！とまたるゝ自分の言葉を叱りもあえずに對手の言葉に腹立しくなつて来る。眞面目にもの言ふ時といふと叱り氣味の口は益々吃つて来て、終ひには勝手にしろと呼ばせられてしまふ。叫んでしまつても言ひたいことは腹の中でもちやくして居るので、男は夢中になつて足を急いだ。

夫婦は今朝、夜のやうく明け離れた頃に、郡山をたつたのであつた。行手に濃く置めた霧の中に、仲よい話を轍の音に載して、笹川の宿にかゝつた頃、ふとしたことから大聲になつて、十戸寺は今夢中で過ぎやうとして居る。

頭重げに伏した兩側の稲田に、役目果して氣が緩ばんとやらに、横倒れの柴山子がところろく。近くの松山に人の聲するのは、草狩りの人達であらう、白い手拭ひが時々見える。

箱車の輪の回りに交る股引の足の太跨なのを眺め乍ら女は歩を早めず緩めず、何て怒りつばい人だらうと心に繰り返した。併し正直な人だと心の何處でかて言つた。親方が死んでから、いつとはなしに身を委した男は親方の弟子であつた。しかも、仕事のがろいとて一日小言を言はれ通しの……しかし、あのエへ、とよく笑ふ、笑戯の二つも云ふ、陰へまはつては袖も引きかねまじき、も一人の弟子と、これにて五人目だとかいふ、よく女房を取り替へる、年の親子ほども違ふ親方との中にあつて、内儀さんくんと真面目で呼んでくれる男の、むつつりとした正直顔が。殊の外氣に入つたのであつた。あまり面倒を見過ぎると、親方がよく喧嘩をはじめたものなつて、然しなんの、負けては居なかつた。などといふやうなことを女は考へて居る。

弓なりに曲る道の、丁度其中頃にあたる石橋を渡り乍ら、男はふつと振り回つて見た。股引妻が々々しい男仕度の女は餘程離れて来る。男の心はよほど解けて居た。一體彼れは悪る氣といふは少しも持つて居ない男である。彼れの正直はよく怒らせて、またよく解けさせる。考へて見れば何てもないことだと、二すぢ残る荷馬車の轡を無意識に通り乍ら心に咬いた。それからもう、晚の木賃宿の、膳にのぼる肴のことなどを考へて居る。

道はやうく廣くなつて来て、草を飛び出て前をよぎる蟻もなくなつた。今汽車が通つたばかりの

踏切りを越して須賀川の地にはいつた。空に漂ふ煙は東へと高く薄く、程近い町はづれの停車場の、ブツツチを行き交ふ人影が小さく見える。男はやをら車をとめた。町に入る用意に、白と赤とて張つた看板の大洋傘を箱の上に廣げてたて、序でに煙草一服、またそろりと臭き出した。追ひついた女は此時車の後に手をかけて居た。しかし夫婦は何も言はなかつた。

ぞろぞろと出て来る停車場からの人達に交つた夫婦は賑やかな町には入つた。朝ながら市日の今日は賑はしい。

「洋傘の張り替なほし——」

一聲呼んで息を引いて、あたりの店を見廻した時、女は二三軒後れて、とある呉服店の前に腰をかゝめて居た。

「洋傘の張り替直しはござんせんかね？」

少しなまりのある、尻上りの優しい聲が空を振りまかせる。

町も最早中頃と思はれる頃、暫く道に發の見えなかつた女は一本の洋傘持つて車に近づいて来た。

男は車を道によせて、轡をくゞつて車をとめる。

「どこだ？」道具の箱をひき出し乍ら。

「骨二本に、柄と……」夫婦は常に反つて居た。

敷いて間もない砂礫の上に、夫婦は蹲んで仕事をはじめた。

「お前さん、一寸其然とつとくんな」

「おいまた」

男の聲は常にも増して勢よかつた。

山路の霧も晴れたであらう、打ち水のもと涼氣よい街に、朝日のかけはうら／＼かにさして居る。

丁度向ひの魚屋に。勇ましい呼聲がして艇の荷が今はいつたらしい。

人

煙 草

愛知林よし子

實に煙草の味は忘れられない、朝眼が覚める、蒲團の中から手を伸ばして火鉢を引き寄せ、お眼
覚め一服、中に捨てられぬ處がある。首だけ上げて見ると、妻は朝飯仕度で、急しうに勝手元で
カタコト音さして居る。

「あ、尤う起きて遣うか …… ウーン」

と呻りながら煙管を投げ出すと、序に脊伸びをやる。

妻「早く起きて下さいな！」

「起るから喧しく云ふなよ」

「だつて尤う何もかも出来て終つたんですもの」

「まあ待て、一服喫はにやならん」

終ひ起さそふれて終つて、又悠々と喫み始めた。そして火鉢の壊れる程ポカン／＼叩く。漸と起

きて、顔も洗つて席に着くと、理もなく煙管を握る。ポカ／＼と揚氣にかまへて、宛然大砲の煙

宜しくと云つたやうに、輪に輪をかけて吹き出す處は、まことに乙だが、鼻の穴の煙ぶる處には、

サクバリお氣が着かれぬ、煙突代用は威心が出来ぬ。

其間に妻君が氣を利かして新聞を持つて来る、その親切は殆ど感謝に價するが、後の言ひ草が氣

に入らぬ。

妻「貴郎、あまり御後りして被居ると、時間が遅れやしませんか？」

「なあに、知つたら、一寸一服やるまでだ」

と一瞥を呉れる。